

「人類学」以前のフィールドワーク——ダーウィン『ビーグル号航海記』と現地語の習得——（未定稿・2002年頃）

池田光穂

1. はじめに——フィールドワークの条件——
2. 怠け者学生チャールズ・ダーウィン
3. 帝国軍艦ビーグル号の船出
4. 野蛮人との遭遇
5. フェゴ島民の印象
6. フィッツロイのフェゴ島民再定住計画
7. おわりに——実証主義の理念とフィールドワークという実践——

1. はじめに——フィールドワークの条件——

一八八四年、エドワード・タイラー (Edward Burnett Tylor, 1832-1917) は、オックスフォード大学において初めて人類学の授業をおこなった。その後、九六年には英国初の人類学教授になるタイラーはイギリス「人類学の父」と呼ばれるようになった。それに遡ること約半世紀、タイラーが生まれた年の一二月、『種の起源』の著者でのちに生物進化論の父と呼ばれるようになるチャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-82) は、南アメリカの最南端のテイエラ・デル・フェゴ島（以下、フェゴ島）に到達し、そこに住む先住民と出会った。

ダーウィンが接触したフェゴ島の先住民たちは、この時に初めて西洋文明人と遭遇したのではなかった。一六世紀後半から断続的に接触があり彼らの生活に関するいくつかの記録が残されている。遭遇を通して強い印象を持ったのはフェゴ島民よりも、むしろ当時二二歳の青年ダーウィンその人にかならなかった。この接触はダーウィンの進化論や人間観に対してさまざまな影響を与えた。

本章で取り上げる議論は、ダーウィンのフェゴ島でのフィールドワークである。タイラーがおこなった授業を制度的人類学の開始として意味づけるとしたら、ダーウィン時期は、その誕生の半世紀前の出来頃であり人類学はまだ産声をあげていなかった。今日の人類学にとってフィールドワークは不可欠なものである。もちろんフィールドワークは人類学だけの専売特許ではない。人類学以前にも、ダーウィンの観察に見られるように、現場で資料を採集するフィールドワークはあった。人類学以前の時期のフィールドにおける活動が、人類学のそれとはどのように異なるかをここで考えたい。

人類学のフィールドワークの特色については、これまでに多様な議論がなされてきた。現在でもそれ自体が論争のテーマになるほどフィールドワークの特色については様々な見解がある。にもかかわらず人類学のフィールドワークの特色として次の三つの点に関しては、研究者の間で特に異論は出てこないだろう。人類学のフィールドワークにおいては、研究者は調査地において（1）長期滞在し、

(2) 現地語の習得を前提として、(3) 参与観察の要素は欠かせない。

これら三つの活動から、人類学者は他の領域の研究者とは異なり次のような資料を手にすることができる。つまり現地における長期滞在は、人々の生活に関する網羅的情報を収集することができ、それらの個々の社会現象を総合的に関連づけて考える可能性が生まれる。このことを達成させるには、現地語の習得が不可欠である。なぜなら、通訳を使ったり、交易のために使われる広域共通語（ピジン語）では、研究対象の人々との十分なコミュニケーションをとることは難しいからだ。したがって現地語を的確に理解し流暢に話せることは、現在の人類学者のフィールドにおける実質的な必要条件となる。また参与観察とは、現地での様々な行事や活動に許可をもらって実際にその活動に従事することである。この参与観察で得られる体験や資料は、インタビューで得た質問と応答の情報を確認し、補強するものとなる。これらの活動を通して、人類学者は外部者として現地の人々を客観的に観察するだけでなく、内部からの視点つまり「現地人の視点」からものを考えることができるようになる（と言われている）。

もちろんこれらの活動がつねにフィールドにおいて順風満帆に進むとは限らない。調査者が予め抱いていた常識が揺るがされたり、自身の感情が逆撫でされるなど、それまでの調査者の既成の価値観がことごとく打ちのめされるといふ強烈な体験（カルチャーショック）に苛まれることがある、実際に大なり小なり人類学者はこのことに苦しめられる運命にある。しかし、調査者がそれを乗り越え現地の社会生活に適応すれば、現地の人たちが共有する文化の把握のみならず、自分たちが属する社会の文化について反省的な視点を取ることができる、ないしはその可能性をもっている。ダーウィンのフィールドワークと今日の人類学者のそれは、どのように異なるのだろうか。この両者の間の違いは、人類学を学ぶ私たちにどのような意味があるのだろうか。

そのことを検討する前に、まずビーグル号に乗船する前のダーウィンが、どのような生活を送っており、どのような経緯で乗船するようになったのかについて知っておく必要がある。

2. 怠け者学生チャールズ・ダーウィン

チャールズ・ロバート・ダーウィンは一八〇九年イングランドのシルズベリーの比較的裕福な家に生まれた。父ロバートは医師でチャールズにとってうるさい頑固親父であった。ダーウィンの伝記には凡庸な父ロバートよりも、父方の祖父で医師、博物学者、詩人のエラスマス・ダーウィン（1731—1802）と母方の祖父でイギリスの製陶業の刷新者であるジョシュア・ウェッジウッド（1730—95）の名が挙がる。とくにエラスマスは医師を開業する傍ら、当時の啓蒙的知識人の集まり「ルナ・ソサエティー」を創設し、自らの生物進化の思想についてまとめた『ズーノミア』をはじめ一連の著作をあらわした大博物学者であり、後に孫のチャールズの進化論にさまざまな影響を与えた。

チャールズ・ダーウィンは決して出来の良い子どもではなかったようだ。学校では怠け者で物覚えが悪くという評判の少年であった。彼の科学への憧憬は、野山を掛け歩きさまざまな生物を捕まえた観察することや兄のエラスマスの化学の実験の手伝いから始まった。

一六歳当時の怠け者のチャールズに業を煮やした父は、彼を学校から辞めさせて、家庭で教育を授けると同時に家業である医療の実務経験につかさせた。チャールズがそこそこ医業をこなせることがわかると父は、エジンバラ大学の医学校に彼を入学させた。彼の兄はケンブリッジの医学校で優秀な成績で学業を続けていたので、父は弟のチャールズと一緒に住ませ勉強を続けさせた。しかしチャールズの怠け癖は抜けきらず、授業にだけは出席するが、それ以外は学校の外での博物学——原語の *Natural history* は文字どおり自然史のことである——の勉強に傾斜していった。彼は自然を散策したり博物学研究仲間の小さな集会に参加するようになる。とくに、動物の剥製づくりを黒人解放奴隷のジョン・エドモンストーン (John Edmonstone) から学んだことは重要である。エドモンストーンは南アメリカのガイアナ出身で、英国で奴隷の身分から解放された後、一八二五年当時エジンバラの医学校で剥製術を学生たちに教えており、ダーウインは授業で彼と知り合ったのだ。ダーウインは私費でエドモンストーンを雇い、剥製の技術を特別に教えてもらったり彼の出身地の熱帯の南アメリカの自然のことなどを聞き、探検への夢を馳せた。

博物学にかまけ医学に専念しなかったダーウインはついに二年後の一八二七年四月に医学校を退学し、故郷のシルズベリーに戻る。父は再びの息子の怠業に業を煮やし、今度は息子に神学を学ばせることにした。ダーウインは同年一〇月にケンブリッジ大学キリスト・カレッジに入学した。しかし、今度ばかりはダーウインを喜ばせた。聖職者になり田舎で生活することになれば、思い切り博物学の勉強に専念することができると夢想したからだ。もつとも生来の怠け癖は治るわけでもなく、授業よりも昆虫とくに甲虫類の採集に熱を入れ、ガールフレンドに振られてもダーウインは全く気にすることはなかったというエピソードまである。だが当時、ケンブリッジ大学植物学教授で、あらゆる自然科学に通じていたジョン・ヘンスロウ師 (1796-1861) との親交を深めたことは彼に大きな変化を与えた。ヘンスロウ師への私淑は著しく、かつてチャールズ・ダーウインの名前よりも「ヘンスロウ師と歩く男」ということで名を馳せた。ケンブリッジの神学部では多少の勉強の甲斐あって一九三一年四月に卒業することができた。卒業後、当時ヨーロッパで最も著名だった博物学者アレキサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769—1859) による七巻におよぶ学術探検記『一七九九年から一八〇四年におけるアメリカの赤道地帯への旅行についての個人的記録』を読んで感銘を受けたという。

3. 帝国軍艦ビーグル号の船出

一七世紀後半より世界の海では海賊の横行は減少し世界周航の航海術はすでに確立したものとなっていた。ダーウインの乗船に遡る六年前、ビーグル号は一八二六年にフィリップ・キング船長の英国海軍アドベンチャー号とともに南アメリカ沖の海図作成のための測量航海に出帆した。この第一回目の航海の時、ビーグル号船長ピンゲル・ストークスは一八二八年南アメリカの最南端フエゴ島付近で自ら命を絶ち、かわりにロバート・フィツロイ (Robert Fitzroy, 1805-65) が船長の代理となり、測量航海の任務を引き継ぎ遂行していた。この事件当時、フエゴ島民と乗組員との間に何からの諍いがあり、軍艦のボートがフエゴ島民によって盗まれるという事件がおこった。フィツロイは、これに対する懲

罰行為として島民の何人かを人質として船に捕らえた。さらに、真珠貝のボタンと一人の少年ジェミー・ボタン——これは彼が「ボタン」と「交換」されたことにちなんだ名前である——ならびにフィエギア・バスケット——これもフェゴ島の名前と「籠」の語呂合わせを想像させる——という少女に収容した。彼らはそのまま乗船し、引き続き航海を続け、一八三〇年イギリスに帰還した。フェゴ島民は、成人男性二名と、ボタンとバスケットの四名がイギリスに到着したのだが、あいにく成人男性の一人は天然痘で死んでしまった。残った一人はヨーク・ミンスターと命名されていた。

フィツロイは生き残った、フェゴ島民であるジェミー、フィエギア、ヨークの三名を生まれ故郷のフェゴ島に帰還させることを希望していた。それは、イギリス海軍が二度目の航海計画にフィツロイをビーグル号の船長に任命する前のものであった。ところでフィツロイは、二回目の航海の後にダラム市議会議員やニュージブランド総督に選ばれるが、政治のほうは苦手であったようではかばかしい成果はあげなかった。しかし気象観測などの自然科学の分野で研究することには長けていた。彼はフィツロイ式気圧計を考案したり気象観測の研究に通じていた。後年は天気予測を新聞掲載するという今日の天気予報の先駆けのようなこともおこなった。フィツロイは二回目の航海の船長に任命された時、博物学（＝自然史）の研究者を乗船させ、自分の任務である南米の沿岸測量の任務のほかに、周辺の博物学的調査に従事させようと考えた。この計画は、イギリス海軍のものではなく、フィツロイ自身の考案によるものであり、また乗船する博物学者は無給という条件であった。

ダーウインはケンブリッジ大学を卒業後、アフリカ北西岸沖にあるカナリア諸島への博物学探検旅行の計画をヘンスロー師に打ち明けていた。ヘンスロー師の紹介もあり八月の末にダーウインはフィツロイ船長から正式に、ビーグル号での探検航海に博物学者として参加することに誘われた。父ロバートは、この計画への参加に難色を示したが、母方の叔父で将来彼の舅（＝妻の父）となる二代目ジョシュア・ウェッジウッドの助言で、航海への参加への同意が得られた。しかして一八三一年一月二七日ビーグル号はイギリスのダヴェンポート港を後にして四年一〇ヶ月の航海に出たのである。

4. 野蛮人との遭遇

ダーウインはフェゴ島に到達するまでに、ビーグル号の寄港地であった、ケーブ・ベルデ諸島を経由してブラジルのサルバドール（バイア）、リオデジャネイロ、モンテビデオ、ブエノスアイレスを経てパタゴニア沿岸、およびフォークランド諸島（マルビナス）の各地を探検している。

一八三二年一月一七日ビーグル号は、フェゴ島のサンディエゴ岬を南下しながら西に舵をとり、グッド・サクセス湾に錨を降ろした。このとき陸地にいたフェゴ島民が飛び跳ねながら船を追いかけ奇声を発し、夕暮れにはみすばらしい家に火を焚く姿を乗組員たちは見ている。翌朝フィツロイ船長は、彼らと「交渉する」グループを派遣し、そのメンバーにダーウインも含まれていた。

ダーウインが接触したのは、ハウシュ（Haush）と呼ばれ、またマネケンケン（Manekenkn）と自称する人たちであった。ハウシュの人たちは言語的にはより近いオナ（Ona）あるいはシェルクナム（Shelknam）と呼ばれるより大きな民族集団と祖先を同じくしており、文化の諸要素は共通するもの

が多い。しかしオナはこの当時、東岸の山岳地帯を越えてハウシュの居住地帯に侵入ししばしば襲撃を企てていたという。ダーウインの記述によるとジェミー少年はタケニカ (Takenika) と呼ばれるグループに属していると記載されているが、この集団は何らかの親族をあらわす出自集団の名称を指すものだと思われる。フエゴ島には、ハウシュが住むフエゴ島南東端よりもさらに東側の沿岸に带状に広がり棲んでいたヤガン (Yagan) と自称する人々がおり、さらにその西北太平洋岸に沿って北上するとアラカルフ (Alacaluf) と呼ばれる集団がいた。当時、彼らの文化についての総合的な資料はなかったし、ダーウインはこのことに当然のことながら不案内であった。彼は、これらの人々について時に相互に区別して呼んだり、時に「野蛮人」として一括して言及している。なお本章で私が言う「フエゴ島民」ないしはフエゴ島の「先住民」とはハウシュの人々をさしている。これらの人々は、海岸では魚介類や海獣を、また内陸においては大型鳥類や哺乳類を捕獲していた狩猟採集民であり、同じところに定住することはなく主に沿岸をカヌーで移動しながら、簡単なキャンプをつくりフエゴ島の沿岸に広域的に分散して生計をたてて暮らしていた。

さてフィッツロイ船長以下の上陸隊は、恐る恐る彼らと接触を開始した。『ビーグル号航海記』には、一群のフエゴ島民がこちらにもまた恐る恐る掘立小屋の家から遠巻きに上陸隊を見守り、その手前に「長老」格の老人が上陸隊（ただし凶像には登場しない）を迎えているスケッチが収載されている。上陸隊に加わったジェミーは、この住民たちのことばを理解できなかったらしい。ダーウインももちろん先住民の言葉を理解できなかった。その代わりに上陸隊は身振り手振りでフエゴ島民とのコミュニケーションを試みている。この先住民との接触の方法は、それよりはるか以前に遡るコロンブスの探検や、この接触当時から遡ること半世紀前のクックの探検におけるやり方とそれほど変わってはいない。彼らが先住民の言語を理解しなかったことは、人類学の誕生以前のフィールドワークの最大の特徴といえることができる。

5. フエゴ島民の印象

フエゴ島民と上陸隊との接触は次のような言葉でつづられている。

「挨拶のできる距離にわれわれが到着したとき、我々を受け入れるために進み出た四人の先住民の一人は、上陸する場所を教えるのに激しく叫びだした。我々が海岸につくと、先住民の連中はやや警戒しているようだったが、しかしながら、その間かなり速く喋りかつジェスチャーを続けていた。私がかつて見たなかでは最も奇妙で興味のある見せ物であることは確かであった。というのは、野蛮人と文明化された人の間にこれほど著しい隔たりがあるとは私は信じられなかった。つまり、人間には改善の偉大な力があるはずだから、この隔たりは野生動物と家畜との差よりもさらに大きな違いがある」

(Darwin 1997:195-6)

ダーウインは幾度も先住民たちとの違和感を主に視覚的表現を通して述べている。それらは、彼ら

のみすばらしく奇妙な衣装や顔面の装飾にもっとも典型的に表れる。『ビーグル号航海記』の別の箇所では、ヨーロッパの宣教師たちが、先住民の顔や四肢への刺青を野蛮の表象としてつねに嫌悪し、その習慣を幾度も止めさせようとしたことについて言及がある。他方、先住民文化に対する人類学の初期の記録にはこれらの刺青のデザインについての事細かな記録が残っている。先住民の顔面や身体への部位への装飾は「他者」である彼らと「自己」としての私たちを、もっとも際立たせる異文化表象なのであった。

フエゴ島民と接触したダーウィンの頭の中には、文明人と先住民の絶対的な距離の隔たりしかない。それは、先住民を文明人と分かち特異的な能力の差に現れる。

「彼らはすばらしく物まね上手である。われわれが咳をしたり、あくびをしたり、あるいはなにか変わった動作をすると、彼らはすぐそのまねをした。…彼らは、われわれが話しかけた単語の一つ一つの語を正確に繰り返し、しばらくの間それらの単語を覚えていた。…すべての野蛮人は並はずれて、この模倣の力をもっている」とみえる。…この能力をどうして説明することができようか。これは野蛮な状態にあるすべての人々に共通したことであって、永らく文化的教養に浴している人々と比較しても、知覚のより実践的な慣習やより鋭敏な感覚の帰結によるものである」(Darwin 1997:196-7)

模倣の能力のみならず五感の感覚能力について先住民のほうが文明人より優れているというこの種の記録は、当時のヨーロッパの知識人に共通した見解であった。しかしこの主張は、ダーウィンが後に打ち立てる人間の種としての生物学的共通性の主張とは論理的齟齬を引き起こす。なぜなら一方で、先住民と文明人の両者の間で感覚力に差異が有ると言い、他方で両者は同じ人間として環境に適応できる獲得能力をもつと主張されているからである。この先住民と文明人の間の生物学的な能力について差異があるかどうかについては、長い間議論の対象になった。実際、制度的人類学が誕生する頃の一九世紀の最後の四半世紀から二〇世紀の初頭にかけて、心理学者、医学者、そして人類学者——場合によっては三者を一人の人間が掛け持った——たちは、フィールドに出かけてさまざまな身体能力や知能検査を含む心理的能力の調査に従事し、このことを検討することになる。先住民と文明人の間で、生物学的能力において先天的な差異というものがなく、先住民の優れた感覚能力は後天的に獲得されたものであることは、このダーウィンの遭遇から遙か後に証明されるようになる。

ダーウィンは航海が終わってからも、フエゴ島民の知的レベルを、ロンドンの動物園にいた「ジェニー」と愛称されていたメスのオランウータンや、後に結婚して生まれた自分の子供たちの観察を通して、文明人の子供と同じ知的発達レベルにあると考えていた。フエゴ島民の言語をダーウィンが理解できなかったことは、彼がいくら深く観察しても、彼自身が予め抱いていた人間の文明の発達に関する議論から自由になれなかった主要な原因になっている。

他方で、ダーウィンが遭遇の前までに知っていたフエゴ島民は、一年間一緒に航海してきた「文明化した」人たち——彼らは簡単な英語が話せた——であった。したがって彼は、ビーグル号に乗船している三名のフエゴ島民と上陸して接触したフエゴ島民が同じ「人種」であることを理解するのに非常に

苦しんだ。もちろん文明化したフエゴ島民においても、洗練された知的能力を未だもっていないのではないかと疑っている節がある。いずれにしてもダーウィンは、接触した島民の生活の様子、つまり彼らの身振り、そして彼らの言語に非常に奇異な感じを覚えるのである。そして彼自身は島民をいつまでたっても理解できないのではないかという危惧すら抱く。ダーウィンが最も理解に苦しんだのは、彼らの言語であり、彼にとっては次のような特徴をもって聞こえたというのである。

「我々が気づいたところでは、これらの連中の言語はほとんど音節をはっきりと発音してはいない。キャプテン・クックはそれを咳払いをする人にたとえたが、ヨーロッパ人ならば、これほどしわがれた、喉にかかる（＝口蓋音を発し）、舌打ち音をたてて、咳払いをする者はいない」(Darwin 1997:196)

他者の言語が初めての人に奇妙に聞こえるのは、人間がもつ基本的偏見の一つでありダーウィンにおいても例外ではなかった。ハウシュを含むオナの人たちの言語学を含む人類学的な調査については二〇世紀の最初の四半世紀に行われている。その結果、ハウシュやオナは、隣接するヤガンの人たちよりも、パタゴニア南端に住んでいた先住民テウエシュ (Teush) と言語学的には類縁関係があることが判明した。ダーウィンが先の引用で描写した「舌打ち」の発音とは現在の言語学においては摩擦音とされているもので、また「うがいをする」音とは口蓋垂という喉の一番奥の部分で声門化する音であると考えられる。実際に、遭遇からおよそ一世紀後の人類学者はオナの人たちの発音上の特徴を破裂音と軟口蓋音に特徴づけている。このような音声は、非ヨーロッパ語には広くみられる発音の形式であり、現在の我々にとっては何ら驚くべきことではない。

先に挙げたように視覚表象とともに、人間の主要なコミュニケーションの手段である言語活動もまた、このように未開と文明を分かち一つの特徴とされたのである。ダーウィンは、文明化されている西ヨーロッパの言語よりもフエゴ島民の言語は劣っており、それが発音上の違いに表れていると考えたのだ。しかし、今日では特定の言語の間に優劣があるという考え方は放棄され、人間は特定の言語において意味の差異を作り出すためにさまざまな発声を区別するのであり、発声の区分から生まれた発音そのものに優劣の差異をつけることはできないし、またそのような行為は無意味であると考えられている。

このように現在の人類学の水準から言えば、ダーウィンの観察は独断と偏見に満ちたものだった。しかしながら、ダーウィンは、ヨーロッパの文明人との隔たりにとまどいながらも、それらが先天的なものではなく、習慣の差によって現れる可変的なものとしてとらえていることに注目すべきである。人種差別的偏見にみられるように文明人と先住民の間に移行不可能な壁があるとダーウィンが考えなかった理由の一つには、先に述べたようにビートル号に乗船していた三人のフエゴ島民の観察を通してであり、特に英国人と共に生活することで「野蛮人」は文明化（＝発達）すると彼が考えていたからであろう。

6. フイツロイのフエゴ島民再定住計画

ダーウインの先住民観は、フエゴ島民とのわずか三日間の接触だけで形成されたのではない。その翌年の一月からの三名のフエゴ島民の再定住計画にダーウインが参加することで、彼の島民に関するイメージは決定的なものになる。

当時二七歳のビーグル号船長フィツロイは、一八二八年当時に同船に「収容」した三人のフエゴ島民を、二回目の航海の最中の一八三三年一月一五日にフエゴ島南岸のビーグル海峡周辺に帰還させる計画を実行に移そうとしていた。この具体的計画はフエゴ島の南側を東西に横断するビーグル海峡の南にあるナヴァリン島の西端の入り江ウーリヤに、宣教師マシューと三人の「文明化された」フエゴ島民三人を入植させ彼らの故郷への再定住と、周辺にフエゴ島民のキリスト教化を目的とするものであった。ダーウインが、この計画に同行したことは、彼にとってフエゴ島民の生活意識を知るための、ある種の参与観察の体験になった。

一八三三年一月一九日に「文明化した」三人のフエゴ島民定住のための荷物を載せた四隻のボートは、ビーグル海峡を西に進んでゆき、四日後の二三日に目的地ウーリヤについた。フィツロイ船長自ら率いたこの小舟の船団は、ウーリヤをその入植地として定め、そこに小屋を建て、二枚の耕作地をつくり、種まきをおこなっている。再定住のための入直地に到着するまでに、海岸からは多数のフエゴ島民が船団の姿を発見し、興奮して彼らを追いかけてきている。やがて知らせを受けたジェミーの親族たちも入植地に到着する。フィツロイやダーウインたちは、その様子を観察した後、さらに水路（＝ビーグル海峡）を西に進み探検を続けていた。

他方入植地では、開拓の数日が過ぎるうちに探検隊からさまざまなものを貰うことを期待した島民と、満足なコミュニケーションがとれずにいらしている探検隊との緊張が徐々に高まっていった。およそ、一週間後に西側の海峡の水路の探検から入植地に帰還したフィツロイとダーウインは入植の計画が困難に直面しているという報告を受ける。つまり、フエゴ島民がおしなべて英国人やジェニーら三名の帰還フエゴ島民に物乞いをし、応じない場合は脅迫したり盗んだりしていたのであった。船長たちは、状況の悪化を考慮し、布教のための入植をあきらめ当初島民とともに定住する予定だった英国人宣教師マシューをこの入植地から引き上げることを決定する。この一連に出来事について、ジェミーは、ダーウインに対して自分たちの同胞がおこなったことを恥じて、初めて口汚い「英語」の言葉を吐いており、ダーウインを驚かしている。ダーウインもまた、これらのことから帰還島民の再定住の努力が失敗することであろうことを予感する。

ダーウインらに乗せた小舟は二月六日入植地を出発し、翌日の夕方にビーグル号に引き上げた。その後、フィツロイ船長は自ら小舟を出して再び入植地を四日後に訪れ、フエゴ島の三名が定着していることを確認し、ビーグル号はフエゴ島を後にすることになる。

ビーグル号がフエゴ島を再訪するのは、それから一年後の一八三四年二月のことであった。ダーウインの予感どおり入植地は放棄されていた。その時ウーリヤの入り江に停泊しているビーグル号に小さな旗を翻して丸木船がやってきた。この小舟に乗っていたのが、半裸の「野蛮人」の状態に戻ったジェミーだった。ジェミーの話によれば、入植後、彼らの再定住地にはオナが北東の山脈を越えて襲撃に

きたという。その後、フェギアとヨークは定住地からさらに西のヨークの故郷に去っていたが、その別れ際は入植地にあった持ち物を奪っていったというジェミーにとっては悲しい経験だった。ジェミーはすでに現地で妻を娶っており、かつての仲間の乗組員たちにイギリスに帰るつもりはないと言った。ジェミーは、ダーウィンを含めたビーグル号の乗組員多くから別れの挨拶を受けた後、ビーグル号を後にして、入り江に戻っていった。

ダーウィンは、フェゴ島民が西洋文明人と接触する度に島民たちが必ず物乞いすることに、軽蔑と同時に哀れみの情を抱いていた。また、ダーウィンはフェゴ島民に対して、西洋のつまらないもの（ポタンヤリボン）と自分たちの豊かなもの（大量の魚介類）を惜しげもなく交換することに、ある種の敬意を抱いていた。ダーウィンにとって先住民は交換の価値が分からない無知な人たちであるが、それを知りながら不当な利益を得る英国人の態度を恥じていた。先住民たちの権力のない状態が、彼らに対して容易に物乞いをおこなうことを容認し、私有財産の観念の無さが道徳の欠如を生み、容易に窃盗を招くと考えたのである。これらの経験から、ダーウィンは、フェゴ島民を英国人を含めたヨーロッパの人間がいくら彼らを文明化しようとしても、フェゴ島民たちが抱く平等化の原理が彼らの所有する財産を相互に奪い去り分散させてしまうので、文明化への発達が遅れるのだと結論づけている。原始状態の平等な原理ではいつまでもたっても社会は進歩せず、有力な首長による統治がその社会に到来した時に、彼らの進歩が可能になると主張する。

7. おわりに——実証主義の理念とフィールドワークという実践——

若き日のダーウィンが船出をしようとしている時、フランスの哲学者オーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) は、人間の知識は神学的、形而上学的、そして実証的段階という三つの発展をおして進歩すると主張して、彼の言うところの実証哲学に関する著述活動を続けていた。コントが夢見ていた思弁を、ダーウィンはそれとは無関係に実際に行っていた。『ビーグル号航海記』がダーウィンの単著として出版された時、社会運動家のフリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-95) は『イギリス労働者階級の状態』(1845) を著した。エンゲルスは、青年時代から父親の経営するイギリス・マンチェスターの紡績工場で働き、労働者の生活を実際に見聞し、来るべき共産主義革命の担い手である労働者たちに夢を託していた。

ダーウィン、コント、エンゲルスの思考の中にみられる特徴とはなにか。それは一九世紀の近代ヨーロッパの知識人の中に、観察をもとにして理論を構築し、それを再び経験的事実から確認することを通して、理論が確かめられるという実証主義の理念の存在である。しかしながら、実証主義の理念が、単純に人類学をしてフィールドワークという知的実践をこの学問分野にもたらしたとは言い難い。実証主義はフィールドワークという作業を根拠づける重要な思想ではあるが、前者の必然の結果として後者が生まれてきたわけではないようだ。

冒頭にあげた人類学のフィールドワークの特徴をもう一度思い起こしてみよう。人類学におけるフィールドワークの特徴は、(1) 長期滞在、(2) 現地語の習得、(3) 参与観察、にあると私は言った。

そして、このことのおさらいにダーウィンのフエゴ島民のケースを検討してみよう。ダーウィンはフエゴ島民と長期に接したわけでもなく、現地語を知るところか習得しようとしなかった。もっとも探検におけるフエゴ島民との濃厚な接触が可能になったのは、フィッロイ船長のフエゴ島民再定住計画があったから、ダーウィンはこの計画に参加することで、フエゴ島民とすくならからず相互交流することができた。文明化の洗礼を受けた三人のフエゴ島民のビーグル号船内における対話や観察、そして彼らを待ち受けていた故郷の人たちとの相互交渉のまっただ中にダーウィンは観察していたことになる。したがって、フィールドワークの必要条件のうち(3)の参与観察は、ダーウィンはクリアしていることになる。

短いフエゴ島での滞在、そしてダーウィーンが人間以外の博物学上の観察に力を注いでいたために、彼はフエゴ島の人たちから言語を学ぼうという発想は全くなかった。あるいはそれらの奇妙な言語を介して島民たちが何を言おうとしているのか、彼には全く分からなかった。したがって人類学上のフィールドワークに必要な(2)の現地語の習得は行われなかった。ダーウィンのフエゴ島民の言語観は、前節で紹介したように少なくともヨーロッパの諸言語と対等な地位を占めていない。フエゴ島民の言語は、模倣の能力の発達したオラウータンや子供の身振り言語からようやく離陸しようとしている原始的な言語だったからだ。

最後に(1)長期滞在はどうかだろうか。ダーウィンはフエゴ島に滞在した期間はわずかであるが、ビーグル号の探検航海は四年以上におよぶ長期にわたるものであった。また彼は上陸の折にはできるかぎり長い間、沿岸地帯への旅行をおこない、多岐にわたる観察記録を残している。人間に関する観察もその例外ではない。観察に長期の時間をかけることの有効性について彼は十分に認識しており、『ビーグル号航海記』の巻末の記述に明らかである。つまり乗船前の偉大な博物学者たちとの交わり、そしてビーグル号での貴重な経験は、ダーウィーンをして次の世代の「若い博物学者」たちに、遠い国々に長期の旅をおこなうことをすすめているのである。観察には長い時間と、実証的手続きが必要であるという認識にダーウィーンが到達していたことだけは確かである。

まとめてみよう。ダーウィンのフィールドワークと、人類学者のそれとの間には、長期観察の必要性和参与観察については共通性がみられる。しかしながら、現地語を学ぶことについては、その必要性の認識は完全に欠如している。このことは、ひいてはフエゴ島民の「現地人の視点」について考えることをダーウィーンが完全に欠落させていたことがわかる。ダーウィーンは、フエゴ島民のことをより深く知ることにおいて、今日の人類学者が当然のことと受け止めている(2)現地語の習得に、なぜ関心をもたなかったのだろうか。さまざまな理由が考えられる。ダーウィーンがフエゴ島民をもともと研究対象としなかったこと、先に述べたように学ぶに価しない下級な言語だと感じていたかもしれないこと、そして、時間的制約である。これらの理由はすべて妥当性がある。

では、なぜ人類学の調査において言語の習得が重要なのだろうか。もっとも簡単な説明はこうである。人間の活動において言語が占める比重は大きい、言語を流暢に話し、現地の人たちが言っていることを的確に理解することは、実証的な観点から理にかなっていると。ところが、実証主義の寵児たるダーウィーンにはそのことがみられなかった。なぜだろうか？

現地語を理解することの必要性は、じつは実証主義とは別の系譜をもった活動に由来するからである。この時期に現地語に深く関わっていたのは実は科学者ではなく、植民地ないしはフロンティアにおける宗教家（特に宣教師）や法律家たちであった。言語を学ぶことは布教のために必要であり——もちろん彼らは同時に植民地宗主国つまりヨーロッパの言語による教育を同時に始めているが——また、土地問題を始めとする先住民と政府・開拓者との間の紛争を法廷で処理するには、先住民の慣習、とくに宗教観や法的観念に通じ、ひいては現地語に精通していることは重要なことであった。宗教家や法律家——後者のアマチュア人類学者の例としてモーガン（Lewis Henry Morgan, 1818-81）が挙げられる——は言葉を学び、語彙を増やし、人々と共に暮らす時間が増えるに連れて先住民社会の文化の概観について報告を始めた。その時に初めて、野蛮人の模倣の能力について、あれこれ想像力を働かすよりも、その実生活の内実に関心をもちはじめた。また「うがいをする」発音に驚嘆するのではなく、その発話の内容を理解しようとする試みははじめた。これらは人類学者が「現地人の視点」と呼ぶ情報を得ようとするものと共通するものである。

もちろん布教や法律の実践に必要な現地語の学習の動機と、フィールドワークにおける現地語の学習の動機は、明らかに異なっている。フィールドワークにおける現地語の習得の動機は、その実証主義的な目的を完遂させるためである。他方、宗教や法律の実践の系譜に位置付けられる活動における現地語の習得は別の動機に由来する。キリスト教の布教の歴史を繙けば容易に理解できるように、布教は現地人を同じキリスト教徒に改宗させることであった。法廷での訴訟に先住民が意見を主張するには、文明人と同じ法的権利を有する同じ人間でなければならなかった。そのために宗教家や法律家は、相手（＝先住民）の世界に深く介入しなければならぬ。相手の世界に介入するためには、むしろ相手の世界のこと精通しておかねばならないからだ。現地語の習得とは、このような先住民の社会に深く関わろうとする活動と関わっている。今日まで世界の先住民の言語について豊富な資料を収集しつづけてきたのはプロテスタントのウィクリフ聖書教会である。彼らの言語資料の収集と分析の目的は文字化されていない現地語の書記法を完成させ、聖書の現地語化を押し進めることで、キリスト教の布教を進めることにあった。これは言語の理解が、相手の世界の介入を前提に動機づけられる一つの例である。

ダーウィンがフエゴ島民と接触してから半世紀後、のちに進化主義人類学とよばれる人類学理論がタイラーらによってすでに推し進められていた。この人類学の理論的関心はダーウィンや、それとは全く系譜を異にするスペンサーの進化主義的思想の影響を受けて、人間の社会の歴史的發展を進化論から説明するということに力点が注がれた。そのためのフィールドでの実証的資料は、訓練された人類学者によるものである必要は特になく宣教師の報告でもかまわなかった。もちろん言うまでもなくタイラーもまた実証主義時代の学者であり、初期の人類学調査マニュアルである『人類学における記録と質問 Notes and Queries on Anthropology』の一八八一年度版に「非文明の地における旅行と居住の効用」という文章を寄稿している。理論的指向がよく実証が難しい進化的な歴史的再構成の仮説を証明するという試みを放棄し、フィールドワークの実践そのものから得られた第一次資料の操作を通して人類学理論を作るのだという機能主義がイギリスの学界に登場するのは、ダーウィンのフ

「エゴ島探検のおよそ一世紀後の一九二〇年代のことであった。「人類学」以前のフィールドワークにおいて、大きな意義が認められてこなかった現地語の習得は、その時には「現地人の視点」を通して対象社会を把握するための、重要な道具として人類学者にとって不可欠な活動になっていた。